

西域ロマンの成立

富谷 至

京都大学名誉教授

I. 西域

渭城の朝雨 輕塵を^{うるお}浥す
客舎青青 柳色新たなり
君に^{すす}勸む 更に尽くせ一杯の酒
西の方陽関を出づれば 故人無からん

唐 王維 (699-759) の「元二の安西に使いを送る 渭城の曲」と題する詩は、我が国でもよく知られている。渭城とは、唐の都長安の西北を流れる渭水の辺の町、安西とは、中央アジアにおかれた唐の辺境統治機関である。古来、西に向けて旅立つ知人を渭水まで送り、柳の枝を手折ってはなむけにした。王維も西に旅立つ友人元二を送り、創作した詩である。

最後の句、「西の方、陽関を出づれば故人無からん」はとりわけ有名で、西域・シルクロードへの門戸である陽関（現在の敦煌市西）、その西はもはや故人（友人）はひとりもない異国の地であるとして、この送別の歌を結ぶ。

陽関の西北には、同じく西域への門戸、玉門関があり、この玉門関を詠う次のような唐詩もある。

黄河 遠く上る 白雲の間
一片の孤城 万仞の山
羌笛なんぞ^{もち}須いん 楊柳を怨むを
春光 渡らず 玉門関
〔涼州詩〕 唐：王之涣

青海の長雲 雪山暗し
孤城 遙に望む 玉門関
黄沙 百戦 金甲を穿つも
楼蘭を破らざれば 終に還らじ
〔従軍行〕 唐：王昌齡

唐詩に登場する玉門関、陽関は、まさにそこか

ら一歩西に向かって踏み出せば、寂寥とした砂漠、そして胡人世界が広がっているといった風景の中にあり、関所は、文明と非文明、中華と夷狄を分ける境界としてイメージされている。

しかし、現実はそうではない。玉門関を挟んで環境が大きく変化するわけではなく、関所は通行者の通行証をチェックし通関記録をとる役所に他ならない。唐詩で詠う辺境の関所は、詩人が描く抒情を象徴する詩語であり、「西域詩」と呼ばれるこれらの詩は、シルクロードの慕情を詠った唐詩の一つのジャンルとなっており、それはまた我が国にあっても、童謡「月の沙漠」、「逍遙の歌」、「通える夢は崑崙の 高嶺の此方ゴビの原」にも繋がっていく。

II. 西域慕情の形成

西域がもつかかるイメージ、それはどういった過程でできあがっていくのだろうか、話は、紀元前二世紀、漢帝国と匈奴との戦争から説き起こさねばならない。

匈奴とは、アルタイ語系のコーカサス人種の遊牧民族国家である。すでに紀元前三～四世紀、春秋戦国時代の文献に登場し、秦始皇帝はその匈奴の侵入を防ぐために、かの万里の長城を築造したことは、有名である。（実際は、すでに戦国時代に各諸侯国が造っていたものを繋いだのである。）

BC202年、秦に代わって統一を完成した漢は、匈奴騎馬軍団の前にまったく歯が立たず、匈奴に対して屈辱的な外交を強いられていた^(註1)が、第五代皇帝武帝（在位 BC141～BC87）に至ってようやく形勢が逆転、匈奴を遙か北のバイカル湖附近にまで駆逐することができた。

その武帝の匈奴戦争は、彼の在位の前半と後半の二回に分けられる。第一次は、BC129からBC119に至る10年間であり、それは河西回廊を制圧（衛青・霍去病の遠征、凱旋）し、第一次で

決定的勝利を得ることでいったん終息する^(註2)。

亡我祁連山，使我六畜不蕃息
失我燕支山，使我嫁婦無顏色

（『史記』索隱所引『西河旧事』）

我が祁連山^{きれんざん}を亡う、
我が六畜^{りくきく}をして蕃息せざらしむ
我が燕支山^{えんしざん}を失う、
我が嫁婦をして顏色なからしむ

第一次匈奴戦争で本拠地である河西回廊を失った匈奴の、哀歌である。

第二次は、武帝晩年 BC99—87 の 10 年間であり、漢は匈奴の壊滅を図って圧倒的優勢のなかでの開戦であった。西域大宛から汗血馬を手に入れ、それを飼育し増やして騎馬戦に万全を期した。名将李広利を総大将として総力戦で短期決着を目指した。勝利、凱旋は戦う前から約束されていた、と誰もがそう信じて疑わなかったのである。

にもかかわらず、である。この第二次匈奴戦争は、漢の思惑どおりには事が運ばず、思わぬ敗戦が重なり、またいくつかの悲劇が生まれたのである^(註3)。その一つが李陵の悲劇であった。

Ⅲ. 李陵の悲劇

天漢二年（BC99）、貳師將軍李広利を総大将とする 3 万の騎兵隊が、酒泉（甘肅省）から出陣した。帝国の総力をあげての匈奴潰滅戦争であったが、命ぜられた輜重隊長の役には満足できなかった李陵は、自ら武帝に申し出て、配下の歩兵 5000 人を率いて別働隊を組織し、西北ゴビの城塞居延（内モンゴル）から北に向かっていく。しかし、不幸なことに、匈奴の主力軍とぶつかり、孤軍奮闘、善戦したものの、軍は玉砕、李陵は匈奴の捕虜となってしまふという結果に終わる。

一年の後、李陵救出の軍が出されるが成功せず、然も失敗の原因は李陵が匈奴に寝返ったからだとの誤報が伝えられたのである。反逆と見なされた李陵は、当時の反逆罪に対して設けられた族刑（父母妻子兄弟が連坐して斬首となる）が適用され、家族は誅殺されてしまう。

李陵はもとより漢に反逆したのではなかった。李陵裏切りは、冤罪であった。しかし当時、匈奴

に寝返る漢人は少なくなく、そのため漢の軍事作戦に多大の影響をきたした、ひいて第二次匈奴戦争の不成功の原因もそういった漢人たちにあったという事情を鑑みれば、漢王朝、武帝が李陵反逆という誣告をそのまま信じてしまったのは、ごく自然であったと言ってもよいかも知れない。しかし不屈の態度をもっていた李陵にとっては、それは武帝に裏切られたということになる。李陵はそれを以て実際に匈奴の側に寝返ってしまい、祖国には二度と戻らなかった。

李陵が匈奴の人となってしまった頃、漢からの使節として蘇武という人物が匈奴のもとにやってくる。ある事件に巻き込まれた彼は、そのまま匈奴に幽閉され、匈奴への亡命を強いられる。その説得の役が李陵であったが、蘇武は最後まで応じず、漢への忠誠を貫き通し、苦節 20 年ののち、ようやく祖国に帰還した。ゴビを舞台としたふたりの対称的な生き様、友情と別離を綴ったものが、「漠北悲歌」すなわち中島敦の『李陵』であり、またわが菱田春草が描いた「蘇李訣別」に他ならない。

Ⅳ. 史実と伝説

漢帝国の滅亡の後、三国鼎立の時代、晋の中国統一を経て、317 年の東晋王朝の建康（いまの南京）への南遷をもって、所謂南北朝時代を迎える。黄河流域、河西回廊といった漢人王朝の中心であった華北は、異民族が支配し、漢人は揚子江流域、江南一帯に追いやられて、かつての故地は遙か遠い異国となってしまったのである。

江南の漢人政権、流寓漢人たちは、いつの日にか華北を奪還し北に戻るといった願いを抱いてはいたが、力のうえで圧倒的優位をもつ北方遊牧騎馬民族を前にして。それは見果てぬ夢でしかなかった。

異民族が支配する華北、さらには河西回廊には、江南に移らない漢人集団ももとより存在し、またかの地での豪族として勢力を維持していた一族もいた。その代表は、李嵩（字・玄盛）である。隴西出身の漢人であり、異民族支配の後涼、北涼時代に敦煌太守となり、400 年に独立して西涼（400-421）を建国する。

405 年、李玄盛は遙か敦煌の地から東晋に使者を送り、東晋への恭順の意を伝えたのである。史書によると李玄盛は、李陵の祖父である李広の子

孫であり、それは取りも直さず李陵の子孫と言うことに他ならない。

確かに隴西出身であるかもしれないが、李玄盛は李広、李陵の血統をひくものかどうか、それは分からない。しかし、西涼の存在、そこで勇躍する隴西の李氏は、華北奪還がもはや現実に不可能な夢となってしまった南人にとっては、英雄と映ったのである。その李玄盛は、あの強敵匈奴で武勲をあげた李広、その孫李陵の子孫であったのだ。

李広、隴西成紀の人。

『漢書』李広傳

隴西成紀の人。漢の將軍広の十六世の孫

『晋書』李玄盛傳

東晋王朝は、かれの忠誠に鎮西大將軍酒泉公の称号を賦与することで報いたのだが、李玄盛の出現は、南の漢人に隴西の李氏である李広、李陵とかれらの悲劇を想起させることになった。

寒沙 四面を平らかにして
 飛雪 千里を驚かす
 風は断つ 陰山の樹
 霧は失す 交河の城
 朝に駆る 左賢の陣
 夜に薄る 休屠の營
 昔 前軍の幕に事え
 今 嫫姚の兵に逐う
 道を失すれば 刑は既に重く
 遅留すれば 法は未だ軽からず
 頼むところは 今の天子
 漢道 日びに休明ならん
 (范雲 (梁 451 - 503) 『文選』 卷三十一)

これは、西涼が滅亡の後、あまり時を置くことなく、南朝梁の詩人范雲が詠んだ詩である。詩文は、漢の時代の匈奴戦争を詠い、また「道を失すれば 刑は既に重く、遅留すれば 法は未だ軽からず」とは、軍事行動のなかで遅延し、無念の死をとげた李広を指している。

さらに『文選』(6世紀 梁)には、「李少卿答蘇武書」という李陵が蘇武に送った書簡が載せられているが、書簡は実際に李陵が認めたものでは

なく、梁の時代に創作された所謂「李陵悲話」であった(拙文末(補2)を参照)。

繰り返し言おう。西涼の存在、そこで勇躍する隴西の李氏は、華北奪還がもはや現実不可能な夢となってしまった南人にとっては、英雄と映ったのである。その李玄盛は、あの強敵匈奴で武勲をあげた李広、その孫李陵の子孫であった。李玄盛の出現は、李陵を悲劇の英雄として描くことに与った。

李陵の時代から500年経った5世紀南朝宋になって、逆臣李陵のイメージが風化していくなかで、隴西李氏の末裔李玄盛の登場は、李陵に対する同情へと変わっていったのである。南朝の漢人にとって、自分たちの祖先が活躍した河西回廊、西域、そこは遙かに遠い、彼方の地であることが、現実とはかけ離れた想像の世界となっていく。漠北、ゴビ、西域ロマンがここに完成する。



隴西の李氏系図

ことがらは、南北朝の分裂が終わり唐に入ってから同じである。

唐の創始者李淵、彼も隴西出身であり、李嵩の

子孫という。それはまた、李陵の末裔ということになる。

（李淵）、姓李氏、諱淵。其の先は、隴西狄道の人。涼武昭王暠の七代の孫なり。

『旧唐書』高祖本紀

唐の時代には、シルクロードを通じての交易が盛んになる。葡萄、ペルシア陶器などの物産が長安にもたらされ、異国に対する興味が西域慕情に加味されたといえよう。冒頭の唐詩を想起したい。

V. ロマンと現実 —— 歴史解釈への影響

想像の西域、西域の叙情は、文学の世界だけではない。それは歴史の解釈、実証にも影響を与え、しばしば歴史家の見識を曇らせ、今日まで続いている。例を二つ挙げて、拙論を締めくくることにしよう。

その1.

武帝の第二次後期匈奴戦争に先だって、武帝は李広利を大宛に派遣し汗血馬獲得を命じた。しかし、それは容易に果たされたわけではなく、一度は、李広利は使命を全うできず、引き揚げてきたのである。烈火の如く怒った武帝は、玉門関を閉じ、使命を果たすまで帰国することを許さなかった。李広利は、仕方なく敦煌で留まり、再度西に遠征する。

道、遠くして、多く食を^か乏く。且つ士卒は戦を患えずして飢えを患う。人、少くして、以て大宛を抜くに足らず。願くば且し兵を罷め、発を益して復た往かん。

天子、之を聞いて、大いに怒り、使を使わして玉門関^{とぎ}を遮して、曰く。軍、敢えて入るあらば、之を斬れ、と。

貳師、恐れて、因りて敦煌に留屯す。

『漢書』李広利伝

「玉門関を閉じられたので、しかたなく敦煌に駐屯した」とあれば、敦煌は西の門戸玉門関の更に西に位置すると考えねばならず、敦煌と玉門関の位置関係につき、歴史家は頭を悩ましてきた。^(註4)

しかし、それは唐詩の「春光 渡らず 玉門関」

「西のかた陽関をいずれば、故人なからん」といった叙情詩の中のイメージが解釈を曇らせたのであり、関所は、通行を制限する境界の barrier ではなく、出入の手続きをする機関であると理解するならば、「入関の承認手続きを認められず、しかたなく敦煌で駐留した」ということで、敦煌と玉門関のどちらが西にあったのかは、問題とはならない。

その2.

1940年 ハカス共和国 アバカン市から中国漢代の瓦、瓦当（「天子」「千秋」「（長）楽未央」「万歳当」の銘文をもつ）や中国式建物の遺跡が発見された。

東西45メートル、南北メートル、中央に面積132㎡の広間、広間の南と北に六室、東西に四室がおかれ、各室は広さ30㎡であり、環頭の鉄刀、玉の耳杯、漢式土器、匈奴式土器もそこから出土した。

一部の歴史家は、その発見の遺跡は、李陵の宮殿であったと見做したのである。^(註5)

ただ、それが李陵の邸宅であったという証拠はどこにもなく、またその地域に居住していた漢人は、ひとり李陵しかいなかったわけでもない。

発見の遺跡が李陵と結びついたのは、やはり現代にも引き継がれた「西域ロマン」のなせるところなのではなかろうか。

（本稿は、第40回雲南懇話会（2017年4月17日開催）及び第44回雲南懇話会（2018年4月21日開催）で行った講演内容に基づいている。）

註

註1 漢初の漢と匈奴の関係 平城の恥

始皇帝により、一旦は、長城の外に追いやられた匈奴であったが、秦が滅んで項羽と劉邦が覇権をめぐる隙を削っている間隙をぬって、オルドス一帯に勢力を伸ばしてきた。そしてBC201年秋九月、匈奴の冒頓（ぼくとつ）単于は、大挙して中国に攻め込んでくる。当時北方の防衛にあたっていた韓王信は匈奴の強さを身をもって知っていたがために戦争を回避して和解を高祖劉邦に進言するのだが、項羽を破って得意絶頂の彼には、それは軟弱・弱腰としか思えなかった。匈奴に投降した韓王に腹をたてた劉邦は、無謀にも自ら三十二万の歩兵を率いて匈奴に目にも見せんと、出陣していく。そして匈奴の騎兵四十万に平城（へ

いじょう)で包囲され絶体絶命の窮地に陥ってしまうのである。遊牧騎馬民族に歩兵で立ち向かう、匈奴騎馬軍団の怖さを全く知らない愚行としか言いようがない。

漢は単于夫人を仲介にして、何とか命脈を保つのだが、世に「平城の恥」とされるこの事件は、その後半世紀にわたり漢にはトラウマとなり、漢は匈奴に対して屈辱外交、土下座外交を強いられることになる。匈奴に定期的に貢ぎ物を献上し、また匈奴単于の側室として皇室の女性を差し出さねばならなかったのである。

註2

衛青と霍去病

衛青は、武帝の皇后衛皇后の弟である。素性は決してよくなく、姉の衛子夫(衛皇后)ともに、婢の私生児として生まれた。歌妓をしていた姉が武帝に見そめられて側室に、そして皇后になるにしたがって、將軍となっていた。幼い頃、羊飼いをしており、そこから騎馬戦術を学んだのであろう。

霍去病は、衛青の甥にあたる。十八才のときに武帝の側近となり、そのときから騎馬と射術に秀でていた。さらに彼は、孫子兵法といった古い戦術を身につけた武人ではなく、新しいタイプの戦争将校であった。部下から人望をえていた衛青とは違い、かれは、人とあまりつきあわない、会話もしない人間であり、他人に対する配慮などはなかった。しかし、贅沢、私欲があったのでもない。肉や穀物があり余っていても、自分にはそんなことは興味が無かったので、部下にわけるといふ発想はなかった。なにか戦争を楽しむ人造人間のような印象がある。しかし、武帝はそのような無機質な「新人類」をことのほか可愛がり、霍去病も見事に武帝の期待にこたえた。

註3 悲劇 その1 司馬遷

李陵の悲劇は、別の今ひとつの悲劇を招来する。はじめ、李陵軍の善戦が伝えられた朝廷内では、彼に対して拍手喝采、皆が賞賛していたのだが、やがて玉砕の悲報が伝えられると、沈鬱な空気となり、更に李陵捕虜の事実が判明すると、こんどは悪しざまに李陵を罵り、果ては罪人扱いするまでに変わっていった。その雰囲気なかで、ひとり敢然と李陵の弁護にまわり、彼の奮闘をたたえ、捕虜になったとしても、必ずや匈奴に一矢を報いるに違ひなく、またそのつもりで李陵は捕虜という屈辱に甘んじたのだと弁護したが、司馬遷であった。そこまではよかったのだが、司馬遷は、その弁論なかで、李広利に対する誣告罪を犯してしまう。具体的に司馬遷のどういった言辞が李広利を誣告した事になったのか、史書は黙して語らず、後世さまざま憶説が出されている。ただ、李陵の善戦を主張することが、戦果なしに終わった総大将李広利を殊更に貶め、そこに誣告という虚偽の非難が生まれたことは、確かであろうし、史書もそう示唆している。誣告罪に問われた司馬遷に死刑が宣告されるが、死の代替として、宮刑、つまり性器を切除する刑が存在しており、司馬遷は、生き恥をさらすことを承知で、こ

の忌むべき宮刑の道を選び、宦官となるのである。すでに取りかかっていた『史記』を完成させねばならない使命を果たそうという苦渋の選択であった。

悲劇 一 その2 貳師將軍 李広利

李陵に端を発し、司馬遷へと飛び火した悲劇は、今度は、李広利をも巻き込んでいく。後期匈奴戦争の総大将である李広利は、紀元前99年、97年と大軍をもって出陣したのであるが、いずれもさしたる戦果を得られずに戻ってきた。やがて、彼の女婿の父である丞相劉屈氂が、皇太子擁立をめぐる冤罪を着せられ、李広利は、自分が大功をあげることで、劉屈氂を救わんとし、紀元前90年、4万の騎兵と9万の歩兵をもって出陣していく。しかし、功をかせったからか、結果としては敗戦を喫し、李広利自身も捕虜となってしまったのである。そして彼は、匈奴の祭祀における人身御供として殺されることになる。

実はその裏には、匈奴単于(王)が李広利を気に入りと、寵幸しつつあるのを妬んだ亡命漢人衛律が仕組んだ陰謀があったのである。

註4 玉門関の位置について

この問題は、下記の諸論文で取り上げられ、様々な意見が出された。

E. Chavennes: *Les Documents Chinois Découverts par Aurel Stein dans les Sables du Turkestan Oriental*, OXFORD 1913.

王國維『流沙墜簡』。

勞幹「兩関遺址考」(『歴史語言研究所集刊』十一一九四七再版)

向達「兩関雜考」(『唐代長安與西域文明』生活・読書・新知三聯書店 一九五七)。

夏鼎「新獲之敦煌漢簡」(『歴史語言研究所集刊』十九一九四八)。

日比野丈夫「河西四郡の成立について」(『中國歴史地理研究』同朋舎 一九七七)。

諸説は関門の開閉によって物理的に東進が阻止されるとの前提に立ち、敦煌と玉門関の位置を決めているのであるが、砂漠地帯という地理条件を考へても、玉門関の開閉が進行の阻止にいかほどの意味があるのか。すくなくともシャバンヌを初めとする先学の頭の中には、barrierとしての玉門関がイメージされているのだが、開所の役割・機能は吏民の通行をチェックしそれを記録するのがその第一の職務であったということ前提にすれば、武帝が玉門関を遮したということ、それは本来ならば玉門関で何らかの手続きと応対を受けるべき李広利の入国手続きの拒否、つまり入国を認めないという行政上の意思表示を意味し、李広利とその配下の者はいくら内地にいても帰国したことにならない。「帰国」を拒絶された李広利は、しかたなくそのまま敦煌にとどまっていた。私は『史記』大宛列傳の件の一節をこう解釈する。

註5 李陵の宮殿

角田文衛「所謂『李陵の邸宅社』について」(『古代北

方文化の研究』(祖国社、一九五四)

角田説が成立しないことは、護雅夫『李陵』(中公叢書)であきらかにされており、私もまったく同意見である。

参考文献

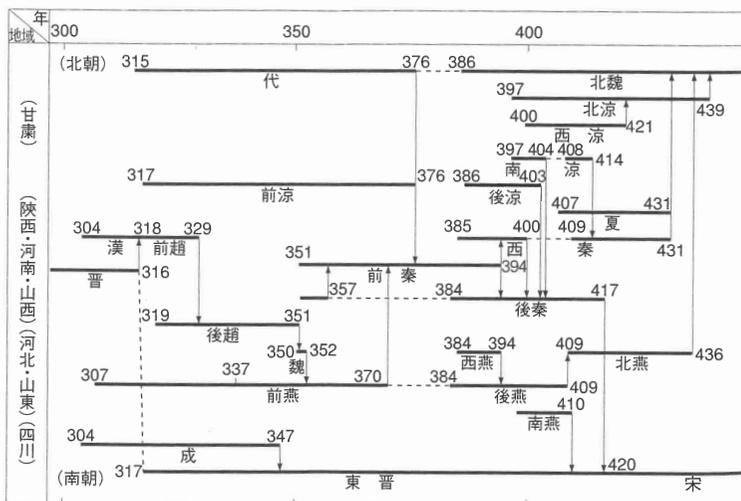
- 1) 富谷 至：『ゴビに生きた男たち 李陵と蘇武』(白帝社、一九九四)

補1 五胡十六国

民族	王朝	創始者	都城
匈奴	漢→前趙	劉淵	左国城・平陽・長安
	夏 北涼	赫連勃勃 沮渠蒙遜	統万 張掖・武威
羯(匈奴の別種)	後趙	石勒	襄国・鄴
鮮卑(モンゴルのトルコ系)	前燕	慕容 皝	棘城・竜城・薊・鄴
	後燕	慕容 垂	中山・襄国
	*西燕	慕容 冲	長子
	南燕	慕容 徳	広固
	*代→北魏	拓跋 猗 廋	盛楽・平城・洛陽
西秦	乞伏 国仁	苑川・武威	
	南涼	秃髮 烏 狐	楽都・武威
	前秦	苻 健	長安
氐(チベット系)	成(漢)	李 特	成都
	後涼	呂 光	武威
	後秦	姚 萇	長安
羌(チベット系)	前涼	張 軌	武威
	* (冉) 魏	冉 閔	鄴
	西涼	李 嵩	敦煌・酒泉
	北燕	馮 跋	竜城

(注：十六国は*を除く)

五胡十六国時代王朝表



五胡十六国時代王朝興亡表

補2 「蘇武に答えるの書」(全訳)

六世紀南朝梁の時代に編纂された詩文集『文選』には、李陵が蘇武に出した書簡「李少卿答蘇武書」載せられている。しかしこの文章は、実際に李陵が認めたものではなく、梁の時代に創作された偽作である。ただ、何故かかる文章がものされたのか、それは本文でも言及したように、この時代に醸成された西域に対する、また李陵に対する郷愁の産物でもある。ここに書簡を全訳し、そこに漂う「西域慕情」を読み取りたい。

【蘇武に答えるの書】

子卿どの。美しき徳をつとめしきのべ、今上皇帝の臣下として名を残され、誉れ限りなき由、誠に慶賀の至りと存じます。

遠く異国に身を置くこと、昔の人も心悲しいとみていたようですが、見晴るかす彼方に目をやって、物思いに耽るに、何とも謂いようのない哀しみが止めどもなくこみ上げてきます。過日、お心にとめてくださり、ご返事を頂戴し、心温かき慰めとお教えを賜りましたこと、肉親にもまさる有り難きことでございます。不東者の私といえども、胸にこみあげるものをおさえることができませんでした。

匈奴に降ってこのかた、我が身の苦しさは、ただじっと堪えることしかなく、一日中、目にする

ものといえば、目の色の違う夷狄ばかり、雨風をしのぐものは、皮の鞆と毛氈のテント、飢えと渴きをみたすのは、ただ生臭い羊の肉と酸っぱい羊の乳しかございません。顔をあげて誰かと歓談しようとしても、誰一人その相手はおりません。莫北の胡地は、厚い氷がはっており、凍てつく寒さに大地はひび割れ、ヒューヒューと吹く悲しげな風の音だけが聞こえてまいります。内地では爽やかな秋九月は、ここ塞外では草木枯れる頃、眠れないまま、夜のしじまに耳をすませていると、遠く胡人が吹きあう葦笛の音色、放牧の馬の悲しげな嘶きが聞こえてきて、ともに交わす胡歌の響きが、あたりから湧き上がり、明け方ちかくまでじっとそれを聞いていると、思わず涙がこぼれてくるのです。

子卿どの。この聲を耳にして、悲しまないでおれましようか。貴兄とお別れしてから、いっぺんに張りがなくなってしまったような気がします。思えば、老母は老齢の身であるにもかかわらず、誅戮をこうむり、何の罪もない妻子は、不義の汚名をさせられ死刑に処せられたのです。私自身、天子の御恩にむくいることができず、世間からは哀れみと蔑みともつかない眼で見られております。貴兄は故国に錦を飾られ、私は胡地に留まって生き恥をさらす、これも運命と申さねばなりません。

礼儀の国、中国に生まれながら、無知の夷狄に身を置き、君や親の御恩に背いて、蛮夷の国で生涯をおえることは、なんとも情けないかぎり、亡父の後を継がねばならないのに、あろうことか戎狄の輩になりさがってしまったこと、断腸の思いが致します。多大の功績に比べれば、小さな罪とも思えるのですが、陛下のご理解を得られず、私の思いとはかけはなれて、せめてもの願いも無視される結果となってしまいました。そのことを考える度に、生きていることなど、もはやどうでもよいという気になってくるのです。

私にとっては、胸に剣を突き立て、身の潔白を証明し、我が首をはねて、本心をしめすこと、何でも無いこととございます。しかしながら、陛下の私にたいする仕打ちを思えば、そんなことをしてどうなるというのでしょうか。我が身を殺しても詮なく、単に恥の上塗りとなるばかり、だからそれ故、齒を食いしばって恥ずかしさに堪え、いた

ずらに生きながらえているのです。まわりのひとは、私のこのような様を見て、入れ替わり立ち替わりやってきては、音楽を奏で、慰めてはくれるのですが、いまひとつ聞く気になりません。

異国の音楽というものは、ただただ人を悲しませ、哀しみを増幅させるばかりではないでしょうか。

子卿どの。人がお互いに知り合うというのは、互いの心を理解することが重要でしょう。先に差し上げましたお手紙は、慌ただしさのなかで認めたものですので、胸の内を十分に述べることができませんでした。そこで、あらまし、今一度述べさせていただきますたく存じます。

その昔、先の孝武皇帝は、私めに五千の歩兵を託され、遙か莫北の地に向けて遠征隊を派遣されました。五人の将軍は道にまよってしまい。私だけが戦いを交える羽目に陥ったのです。かくして万里遠征の食糧をひきあげ、騎馬ならぬ歩行の衆をひきいて、漢帝国の外、強敵匈奴の領域に入り込んで、わずか五千の兵士で十万の軍を向こうにまわし、疲れ切った部下にむち打って、羈も新しい元気いっばいの胡馬に立ち向かっていったのです。それでも、敵將を斬り、敵旗を抜き取り、敗走する敵兵を追いかけ、完膚なきまでに打ちのめし、大将の首をはねました。我が軍全員、死をも恐れず心一つにして、命令に従ってくれたのです。不肖私は、これまでかくのごとき大任を仰せつかったことはなかったのですが、この時の功績はなかなかのものであったと、心ひそかに自負している次第でございます。

敗れた匈奴といえば、そこで国の総力をあげて軍隊をくりだし、改めて精兵を訓練しなおして十万をこえる強兵を率いて、匈奴単于自身が出陣して指揮をとることにしました。主客の立場がどうしようもなくはっきりとしているのみならず、我が歩卒にたいして、相手は騎馬、その勢いも歴然とした差があり、疲れ切った兵が、再度立ち上がって敵に立ち向かい、一人が千人の敵を向こうに回さねばなりませんでした。

それでも負傷した者を抱きかかえ、死をも賭して先陣を争ったのですが、死傷者は累々と戦場に重なり、残った者はわずか百人足らず、しかもすべて傷ついた仲間を助けることで精一杯、とても戦える状態ではなかったと申せます。

しかし、私がひとたび「進め！」との号令をかけると、負傷の部下たちは一人残らず立ち上がり、刀をふりあげ突進し、敵の騎兵を敗走させたのです。手にする武器は底をつき、射るべき矢も尽きはてて、もはや短剣すら残っていないなか、なおかつ素手で鬨の声をはりあげ、我先にと敵陣に突き進んでいきました。

その時、天と地はわたし李陵のために震度し、戦士は私のために血の涙を飲んで堪えてくれたと信じております。そして、単于は私をとらえることをあきらめて、いったん引き上げようとしたのですが、そこに裏切り者がいれ知恵をしたため、戦いが再燃、万事休すとなったわけでございます。

その昔、高皇帝は、三十万の軍隊を擁しながら平城の地で窮地に立たれました。その時には、勇猛果敢な将軍が雲のごとくいて、権謀術数にたけた家臣が雨のごとく控えておりました。それにもかかわらず、七日間も飢えに苦しみ、ようやく脱出できたのです。ましてや、私の場合、どうしてたやすく対処できるのでしょうか。それなのに、中央の役人どもは、あれこれとわからぬことを言い立て、無責任にもどうして死ななかったのだなどと非難しております。確かに、私が死ななかったこと、罪と言えそうですが。ただ、貴兄は私をご覧になって、生きることに恋々として、死ぬことを惜んでいる者だと思われるのでしょうか。君や親に背いて妻や子を棄てる、それが逆に自分に利となると思うものなど、どこの世にいるのでしょうか。

然り、私が死ななかったのは、せねばならないことが残っていたからなのです。前のお手紙で申し上げたように、天子に対して恩返しをしようとしたからに他なりません。

むなしく犬死にするより忠節を立てる方がよく、名を汚すより恩徳に報いるにこしたことはないこと、私とてそれは十分にわかっているつもりです。昔、范蠡は、会稽山で降伏したにもかかわらず殉死せず、曹沫は三たび戦って敗れるという屈辱をうけても生きながらえ、最後には越王勾践に復讐を遂げさせ、魯の国の恥を雪ぎました。不肖私もこのことを内心期待していたわけですが、予想もつかなかったことに志を立てないうちに非難をうけるはめとなり、計画が着手されないうち

に肉親が処刑されてしまいました。私はそれ故、天を仰いで胸をかきむしり、血の涙をしばらざるを得ないのです。

貴兄はまたこう申されるかも知れません。漢王室の功臣に対する処遇は、そんなに薄情ではない、と。あなたは、漢の臣下であるゆえ、そう言わないわけにはいかないでしょう。しかし、過去、蕭何、樊噲は罪人として獄につながれ、韓信と彭越は塩漬けの極刑に処せられ、鼂錯は死刑となり、周勃、竇嬰は罪に問われ処罰されたではありませんか。他にも天子を援け功績をあげた人士、賈誼や周亜父などの人たちは、世に秀でた才を認められ、大臣や将軍の資質を備えていたにもかかわらず、つまらない者から讒言をうけ、ともに禍が身にふりかかり、名誉を傷つけられたではありませんか。才能がありながら誹謗中傷をうけ、范蠡や曹沫のような偉業をうちたてることができずに終わってしまう、誰しもそれは悔やんでも悔やみきれないことだと申せましょう。

私の祖父李広は、天地もおおわんばかりの軍功をあげ、軍略にも富んでおり、三軍に冠たる忠義と勇敢さを身につけておりました。しかしながら重臣の意にそわなかつたばかりに、異国の地で自ら命を絶ったのでございます。これらを見て、功臣や義士達は戟を背に負いつつ、深くため息をつかざるを得なくなるわけなのです。「薄情ではない」と、本当に言えるのでしょうか。

さらに言わせていただきますと、貴兄はかつて単身、使者として強国匈奴に赴き、不運なめぐりあわせから、剣を胸に突き立て自殺せんとされ、遙か遠い地の果てにながされて塗炭の苦しみをなめ、莫北の野で命絶えんばかりの状態に遭遇されたではありませんか。年若くして使者としての任につき、帰ってこられた時には髪は真っ白、ご母堂はすでにお亡くなりになられ、奥様は他家に嫁がれていた。そういったことは世の中ひろしといえどもほとんど聞いたこともなく、昔も今もないことだと言えます。蛮夷の輩ですら、あなたの節義を褒め称えたぐらいですので、天下の主たる聖上におかれては、なおさらのことと申せましょう。私は、貴兄が封土を賜り、諸侯の位を授かるものとばかり思っておりました。ところが、耳にしたところでは、わずか二百万銭が賜与されただけで、就いた位といえば外務次官、あなたの労に報いる

べき封土は、ただの一片たりとも与えられていない。それでいて功績を妨げ足を引っ張る臣下どもは、のこらず諸侯や大名となり、皇室の一族やゴマすりの輩は、そろって大臣になっているではありませんか。貴兄のようなお方でもこの処遇、ならば私など何を望めるといえるのでしょうか。また、漢王室は私が国のために死ななかったことにたいして、ことのほか厳しく、貴兄が忠義を守り通したことにたいしては、わずかばかりの褒賞を与えただけです。

遠く異国でそのことを耳にした私に、あたかも風になびくように命令に従って帰ってこいと申されても、私は二の足を踏まずにはおれません。このことは、幾度も心の中で問い直してみました。しかし後悔するところはないと申せます。

私は確かに恩知らずかも知れません。しかし、背徳といえは漢とて同じこと。「たとえ燃える忠誠心がなくても、死ぬことには潔く」といった諺がございます。私とて心安く死を迎えたいということは、偽らざる気持ち、ただどうなのでしょう、天子は私のことを惜しんでくださるのでしょうか。男子として生まれて名を挙げることができず、死んで蛮族の地に葬られる、それでも卑屈にも土下座しておめおめ朝廷にもどり、小役人ふぜいに好きなように記録されることに比べれば、まだましだと思うのです。私のことは、どうか諦めていただきたく存じます。

子卿どの。もはやこれ以上、なにも申し上げる事はございません。遠く万里を隔て、行きかう人もなく、この世にいても別世界の我々、あの世に行っても互いの靈魂は所を異にするでしょう。永遠のお別れ、どうか知人、友人によろしくお伝え下さい。聖上に忠義をつくされますことを祈念しております。匈奴の地でもうけられたご子息は、お元気でいらっしゃいます。ご安心下さい。

ご自愛のほど。時には南から吹いてくる風が、貴兄の便りを伝えてくれることを念じております。
頓首